

# 沈黙の追撃

2006(平成18)年2月26日鑑賞(ユウラク座)

★★★



監督・脚本＝アンソニー・ヒコックス／出演＝スティーヴン・セガール／ヴィニー・ジョーンズ／ゲイリー・ダニエルズ／ウィリアム・ホープ／ニック・プリンブル／P.H. モリアーティ／ロス・マッコール (アートポート、ギャガ・コミュニケーションズ配給／2005年アメリカ映画／96分)

……今回のセガールによる『沈黙』シリーズは、人間を洗脳し、マインドコントロールすることによって、世界制覇をもくろむテロ集団がお相手。自由の身と10万ドルの報酬を条件に、セガールは昔のプロ仲間を結集してテロ集団のボスの暗殺と捕虜の奪還という任務に挑むが、そのストーリーはこれまでのシリーズ以上に壮大でダイナミックなもの。登場人物が多く、わかりにくいという難点はあるものの、例によって気分転換にはもってこい……。



## 今回のテーマはマインドコントロール……

スティーヴン・セガールの『沈黙』シリーズは次々と製作されているため、今回が何作目にあたるのかわからなくなってきたが、その数字自体には格別の意味はないはず。意味があるのは、何をテーマに描いているのかということだが、今回のそれは、マインドコントロール。

日本ではオウム真理教の麻原彰晃の登場によって、一時期マインドコントロールという言葉が有名になったが、それが完全なインチキであったことは今や明らか。しかしこの映画は、人間の脳に対して恐怖のイメージを埋め込むという科学的処置を施すことによって、ある人物の命令に従う人間をつくり出すという本格的マインドコントロールのよう……？ 一定の人体実験をくり返せば、ひょっとしてこんなことも可能……？

## ワルの親分は？

今回のワルの親分は、科学者のアドリアン・レイダー（ニック・プリンブル）。彼は巨大なダムを隠れ蓑にした秘密基地の中で着々と人体実験をくり返し、人間のマインドコントロール化を実用化する準備を整えていた。それは何のためかといえば、当然「世界制覇」のため。普通は人体実験をする科学者とテロ組織のボスは違う人物という設定だが、この映画では他にも登場人物が多いためか（?）、このワルの組織をシンプルにしているためわかりやすい……。

## 特殊部隊の壊滅は大ショック！

イラク戦争は終わったものの、その本格的解決はほど遠いうえ、それに続くイランの核開発問題が今や大問題となっている。そのため、アメリカは神経を尖らせる毎日が続いている。

「世界の憲兵」としてのアメリカの重要性を私は認めているつもりだが、その役割を果たし続けていくことが大変なことは言うまでもない。

この映画では、南米ウルグアイのアメリカ大使館で大使が銃殺されるという事件が問題の発端。本来大使たちを護衛すべきシークレットサービスが大使を射殺した上、自らの頭も撃ち抜いたのは一体なぜ……？ それは誰かが、どこかから「大使を殺せ」という命令を出し、シークレットサービスたちがその命令にマインドコントロールされていたため……？

そんな分析の中、アメリカ陸軍は特殊部隊を秘密基地に派遣したが、なぜかそれはレイダーのテロ組織の待ち伏せに遭って、壊滅させられる結果に。そして捕虜たちは、レイダーの人体実験のターゲットに……。

世界最強の組織であるアメリカの陸軍特殊部隊の壊滅とは、「世界の憲兵」を自他ともに認めるアメリカにとってドえらいことで、そのショックは、計り知れないほど大きいはず……。

## セガールの立場は？

スティーヴン・セガール扮するクリス・コーディーは元海軍のエリート軍人。

国家の命令によりある特殊任務に従事していたところ、コーディネーに独断専行行為があったととがめられて、今は収監されている立場。しかし上層部としても、特殊部隊の壊滅という非常事態の中、レイダー暗殺と捕虜の奪還という難しい任務を遂行できるのは、コーディネーしかいないと判断、彼に白羽の矢が立つことに。そうなれば話は単純で、その任務遂行の見返りは、自由の身と10万ドルの報酬。さて、コーディネーの選択は……？

## コーディーの仲間たちは？

コーディネーの任務遂行の決断は当然だが、今回はかなり大がかりで特殊な任務。したがって『沈黙』シリーズに時々あるような、セガールの1人芝居のような活躍で済ませるわけにはいかないもの。

そこでコーディネーが信頼できる仲間として選任したのは、①元海軍兵であり潜水艦操縦士のチーフ（P.H. モリアーティ）、②元特殊部隊で一流狙撃手のヘンリー（ヴィニー・ジョーンズ）、③元陸軍兵の爆薬専門家エンダー、ら多士済々の元軍人たち。

さらに男ばかりではなく、美女も登場するからお楽しみは増えるわけだが、例によって大変なのは、彼らの名前と顔と役割が一致しないこと。多くの人は1度観ただけでは、なかなかわからないのでは……？

## チェックすべきは上層部……？

映画の世界でも現実の世界でも、下は真面目に働いているのに、上がインチキをやっているという話はよくある話……。この映画でも、アメリカ大使殺害事件の対策を協議するのはCIA長官たちだが、具体的対応策を立案したのは、そのエージェントであるフレッチャー（ウィリアム・ホープ）。特殊部隊の派遣を決定したのもこのフレッチャーだが、なぜその部隊が待ち伏せに遭ったのか？ それはひょっとして……？

コーディネーは前回の任務で国に裏切られた結果収監される身になったわけだが、今回も国から裏切られる心配はないの……？ 周りが心配しなくとも、利口なコーディネーのこと。それもすべて想定の内か……？

## 潜水艦をもっと活用しては……？

パンフレットによれば、この映画の脚本はアンソニー・ヒコックス監督が書いたものだが、当初のそれでは潜水艦内が主な舞台であるうえ、アクションシーンが少なかったらしい。

そこでアクションシーンをもっと増やすために、脚本が練り直されて本作になったとのこと。したがって、この映画では潜水艦の登場は後半になってから。その潜水艦での攻防はスリリングだが、すぐにこの潜水艦はミサイル攻撃を受けて沈んでしまうことになるから、ちょっともったいない……。

もう少し潜水艦の活用でストーリーを引っ張ってほしかったと思うのは、潜水艦モノが大好きな私だけ……？

## あいかわらず強いネエ……

柔道、剣道、合気道、空手など各種の格闘技をマスターしたセガールが、1対1の対決において絶対的な強さを発揮するのは納得できるし、カッコいいもの。しかしこの映画では、1対1の対決はわずかワンシーンだけで、あとはもっぱら仲間たちの指揮と銃撃戦での奮闘。映画なのだから、と納得しなければならないことはわかりつつ、なお納得できないのは、セガールが撃つ弾は次々と敵に当たるのに、敵が撃つ弾は全然当たらないこと。

さらにこの映画では、1台の戦車を中心とした部隊が、コーディネーターたちのチームに対して攻撃を仕掛けてくるのに対し、わずか数名が銃と手榴弾だけでこれに対抗して、勝利を取ってしまうこと。

こりゃいくら何でもおかしいと思ううえ、この戦車退治もコーディネーターの手榴弾1発でオーケー。戦闘シーンもここまでくると、ちょっとマンガ的……？

2006(平成18)年2月28日記